2025 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	**大学の教員養成における学習の在り方の検討** **ー教員養成段階および現職段階の学習の異同に着目してー**
キーワード	①教師教育、②教員養成、③教育方法学

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏　名	ヤマウチ　エミリ 山内　絵美理
配付時の所属先・職位等 （令和７年４月１日現在）	東海大学農学部・助教
現在の所属先・職位等	東海大学農学部・助教
プロフィール	東海大学農学部資格教育センター助教。教育方法学・教師教育を専門とする。これまで学校現場における校内研修や授業研究に関わるとともに、大学では教職課程を担当し、教員養成に携わってきた。現在は、教師を目指す学生が学習の場で経験する迷いや葛藤に着目し、教員養成の現場でのフィールドワークを通して、学生や教師の学びがどのように形成されるのかを研究している。養成段階から現職段階という各ステージにおける学びの特質を踏まえながら、よりよい教師教育のあり方を探究している。

1. 研究の概要

大学の教員養成における専門職としての学習とはいかなるものか。それ自体が問われないまま、単に一般化された教師役割や教職に関わる規範を獲得していくことが学習プロセスであるかのような単純で直線的な学習観を相対化し、不可視化された実態を明らかにする必要がある。したがって、本研究の問いは、①現代日本の教師教育（養成段階―現職段階）の文脈で重視される学習とはいかなるものか、②養成段階における教職志望学生（以下、学生）および現職段階における教師の学習プロセスの異同とはいかなるものか、の 2 点である。そこから、大学における教員養成における学習の在り方を見出し提起することを目的としている。

2. 研究の動機、目的

本研究は、日本教師教育学会と日本教育方法学会において、これまでの教師教育研究の最新動向や課題状況、当事者に富むナラティブの実態を捉える際の方法論を約 7 年間かけて検討する過程で着想に至ったものである。

教員養成における学習研究の多くは、「学習者不在」のままカリキュラムを開発・改善することに終始しており、学生がいかに学ぶのか、その学習の実態は研究の対象となりえなかった。申請者は、そうした問題の深刻さを確認するとともに、養成段階における学習が単に一般化された教師役割や教職に関わる規範を獲得していくプロセスとして自明視され、学術的にも実践的にも強固な位置を占めるに至っていることに注目した。そして、そのような学習観が無批判のうちに広がってしまうと、葛藤を抱える学生らが養成教育から排除されてしまい、画一化された教師を養成する危険性が極めて高いという認識を抱いた。以上の経緯から、申請者は、教師教育改革において不可視化されている学習者の実態を明らかにする必要性を強く認識するに至った。

そこで、本研究の学術的問いは次の 2 点である。

①現代日本の教師教育の文脈で重視される学習とはいかなるものか
②養成段階における学生および現職段階における教師の学習プロセスの異同とはいかなるものか

3. 研究の結果



本研究では、教員養成の授業における学習の場が、学生たちが他者との関係性の中で「教師らしさ」を模索する学習のコミュニティとして構成されていることを明らかにした。

具体的には、さまざまな背景を持つ学生たちの語りに着目し、承認、衝突、周縁化といった相互作用を分析することで、学習の場の複雑性を描き出した。これにより、教員養成における学習は、養成教育を提供する側から単に知識や技能を受け取る過程ではなく、学問に基づく他者との対話の中で生じる迷いや葛藤、価値観の揺らぎを契機として進行していることが明らかとなった。

また、学習の場において、どのような語りが中心化され、どのような語りが周縁化されるのかは固定的ではなく、相互作用の中で揺れ動くことも示された。しかし、その中でも学生たちは教師としてふさわしい語り方や在り方を探り続けており、そこに教員養成段階における学習の重要な特徴が見出された。

本研究は、教員養成における学習を、知識や技能の獲得過程としてだけでなく、学生による社会的実践として捉える視点を提示するものである。特に、学習を相互作用の中で生じる意味生成の過程として記述する方法論的な視座を示した点に成果があると考えている。

一方で、本研究では、教員養成段階と現職段階における学習プロセスの異同について十分に検討するまでには至っていない。今後は、本研究で得られた視点や方法論を現職教師の学習にも適用し、教師教育の各段階において学習がどのように成立しているのかを比較・検討していきたい。

4. 研究者としてのこれからの展望



今後は、大学の教員養成段階だけでなく、現職教員の学習にも対象を広げ、長期的な成長・発達を見据えた教師の継続的な学習過程について研究を進めていきたいと考えている。具体的には、カリキュラムや研修を提供する側の論理だけでなく、学習者がその場をどのように経験しているのかという当事者側の論理を踏まえ、各ステージの学習を支える在り方を考える。そのため、教師教育の制度やカリキュラム、実践を考える際に、そもそも学習者をどのような存在として捉えるのか。学習の場で生じる揺らぎや葛藤が、必ずしも個人の未熟さを表すものではないとするのであれば、新たな語りや価値観が立ち上がる契機となりうるのか。またその一方で生じる教員養成を担う側の葛藤とはいかなるものかを明らかにしていく必要がある。

教育現場や教師教育の実践と往還しながら、学習者が迷いや葛藤を語り合い、学び続けることのできる教師教育のあり方について探究していきたい。

5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

女性研究者奨励金によるご支援を受けながら研究を継続できたことは、私にとって大きな励みとなりました。心より感謝申し上げます。本研究は、教員養成の現場における学生の学習の場を対象としたフィールドワークを中心とするものであり、継続的な調査や分析を必要とします。皆様からのご支援により、研究活動を着実に進めることができました。

また、研究と教育業務、そして育児を両立しながら研究を続けるなかで、本奨励金は経済的な支援にとどまらず、自身の研究に価値を見出していただいたことを実感できる、大きな励みとなりました。

今後も、教員養成や教師教育に関する研究を通して、教育現場や社会に還元できる知見を積み重ねていきたいと考えております。改めまして、ご支援いただいた企業・団体の皆様、ならびに関係者の皆様に深く御礼申し上げます。